

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第922号 平成27年4月28日

声なき詩

4月6日付朝日新聞に、「声なき詩 命の証」と題する記事が掲載されています。その記事は、東京に住む堀江菜穂子（20歳）さんの事を紹介しているもので、彼女は、脳性まひのために手足がほとんど動かず、寝たきりの状態なのですが、わずかに動かせる手で詩を書き続け、その数は約1200編にも及んでいるそうです。以下、記事を基に堀江さんの作詞活動の様子等を紹介します。

母の真穂さんによると、出産時に危険な状態に陥り、菜穂子さんは重度の脳性まひとなり、今では体は動かず、言葉も話せない状態で、両親の介助をうけて暮らす日々です。

菜穂子さんは、特別支援学校の中等部に在籍していた頃、両親が筆談等を練習して生活力を身につける自主グループに連れていってくれた事がきっかけで、文字を書く練習を始めたそうですが、初めはスケッチブックに大きな1文字を書くのがやっとだったとの事です。

また、詩を書く事も、そのグループ活動の中で覚えたそうですが、母親が小さいころから詩を読み聞かせていた事が大きな力を与えたようです。

大阪発達総合療育センターの鈴木恒彦センター長は「重度の脳性まひで話ができなくても、言葉は理解している人が少なくない」と述べています（4月6日付朝日新聞から）が、そうした障がい者の方々との意思疎通の可能性について、障がい者の身近にいる人達の認識は必ずしも十分ではないように思います。

菜穂子さんは、特別支援学校の高等部の頃、周囲の人の会話の端々から、自分が何も考えていないように思われていると感じたそうで、「こえをだせないわたしたちにも ことばやいしがあることをしてほしい。そんざいをみとめて。」と述べています。

「皆の話す事は理解出来るし、自分でも色んな事を考えている」のに、誰もその事を分かってくれず、自分でもその事を伝えられないという苦しさやもどかしさは、私の想像を超えるものがあり、「そんざいをみとめて」という菜穂子さんの言葉は、彼女の体全体の叫びとなって私の耳に響きます。

菜穂子さんは、右手でペンを挿した紙粘土を握り、B6サイズのノートの上を撫でるように2センチ程の文字を書き、ボランティアの女性が支えているノートを左

にずらし、また次の1文字を書くという具合で、まさに1文字1文字をノートに刻んで行きます。

菜穂子さんは、「それがどんなにふじゆうだとしても わたしのかわりはだれもないのだから わたしはわたしのじんせいをどうどうといきる(せかいのなかで)」、「いまのつらさもかんどうも すべてはいきていてこそ どんなにつらいげんじつでも はりついていきる(いきていてこそ)」と述べています。

菜穂子さんの、言語に絶する苦しい生活の中でも周りの人達への感謝の気持ちを忘れず、ひたむきに生きようとするその姿勢に、真剣に学ばなければならないと改めて強く感じています。

(塾頭：吉田 洋一)